

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 28 日現在

機関番号：34201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885106

研究課題名(和文) 教育と治療の思想史：世紀転換期の教育、心理学、精神医学の間をめぐって

研究課題名(英文) History of Ideas on Education and Therapy: The Relationship between Education, Psychology and Psychiatry at the Turn of the Century

研究代表者

渋谷 亮 (SHIBUYA, Ryo)

成安造形大学・芸術学部・講師

研究者番号：10736127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、教育と心理学・精神医学の結びつきを、フロイトとその同時代の試みの思想史的検討を通して再考することを目的とする。そのために、まず19世紀末以降の子どもを対象とする心理学・精神医学の試みを、治療と教育を結びつける「子どもの科学」として把握した。そのうえでフロイトの精神分析を、とくに知能検査を開発したアルフレッド・ビネーの試みと比較検討していった。これによって、19世紀末以降に形成された「子どもの科学」の特質の一端を明らかにすると同時に、そうした「子どもの科学」に還元できないフロイトの試みの射程を考察した。

研究成果の概要(英文)：In order to reconsider the relationship between education, psychology, and psychiatry, this study investigates some theories and practices of Freud and his contemporaries from historical perspective. At the end of the 19th century, a kind of psychology and psychiatry concerning children began to grow. Firstly, I understand these scientific attempts as "the science of children," which associates therapy with education. Secondly, I compare the attempt of Freud with that of Alfred Binet, who developed the intelligence test. In this way, I discuss some characteristics of "the science of children," and then demonstrate the possibility of Freud's thought that cannot be explained by "the science of children."

研究分野：教育思想史

キーワード：ジークムント・フロイト 精神分析 アルフレッド・ビネー 治療と教育 心理学史 教育思想史

1. 研究開始当初の背景

19-20 世紀転換期、子どもを対象とする心理学や精神医学の試みが形を整えていく。これらの試みは、児童相談などの制度的拡充とともに、教育と治療の密接な結びつきを生みだしていった。ジークムント・フロイトの精神分析も例外ではない。それどころか精神分析は、子どもを取り囲む科学的装置として主要な参照点をなしていたと言える。ミッシェル・フーコーやジャック・ドンズロが示唆するように、精神分析は、ある面では局地的に機能する権力装置であり、教育と治療の連続体を形成していったのである (cf. フーコー 2002; ドンズロ 1991)。

しかし従来の教育思想史研究は、教育と治療との混合にさほど注意を払ってこなかった。むしろ、子どもを対象とする心理学や精神医学の展開や影響が検討されてこなかったわけではない。とはいえそうした試みはしばしば、学校教育の側から限定的にのみ、それらの科学的試みを扱ってきたように思われる。また、その重点は多くの場合、心理学・精神医学の批判的な相対化に置かれてきた。すなわちそれらを、子どもを測定し、理論に合わせて切り捨てるものとして批判し、学校教育におけるその役割を制限することを目指してきたのだと言える。

これに対して下司晶は、精神分析の歴史を学校教育に留まらない範囲で詳細に検討することで、心理学がいかに子どもを組み込んできたかを明らかにする (下司 2006)。あるいはニコラス・ローズは教育学や心理学が子どもを焦点化し、家族と社会の関係を再編成しつつ、正常性に関する知識を提供してきたことを論じている (Rose 1989, pp. 123-213)。

おそらく 19 世紀末から 20 世紀の前半にかけて、治療と教育のあいだで機能する一連の装置が「子どもの科学」として形成され、それが現在まで私たちの教育の土台を形成している。だがその土台がいかなるものかを検討する試みは、さほどなされてはいない。本研究ではこうした状況を踏まえ、教育と心理学・精神医学の結びつきを、フロイトの試みを中心に思想的に再考していく。

2. 研究の目的

本研究は教育と心理学・精神医学との結びつきを、

フロイトとその同時代の試みの思想的検討を通して再考することを目的としている。そのために、まず 19 世紀末以降の子どもを対象とする心理学・精神医学を、教育と治療を結びつける「子どもの科学」として把握する。そのうえでフロイトの精神分析を、知能検査を開発したアルフレッド・ビネーの試みと対比していく。これによって、19 世紀末以降に形成された「子どもの科学」の特質の一端を明らかにすると同時に、そうした「子どもの科学」に還元できないフロイトの試みの射程を考察する。

具体的には以下の手順を取った。まず分析の前提的枠組みとして、フーコーの議論を参照し、「子どもの科学」を、権力装置として捉えていく。そのうえで、フロイトとビネーの試みを、無意識を探求する科学的な試みのうちに位置づける。さらに、子どもの知的活動に関する彼らの議論を対照することで、フロイトの議論の固有性を明らかにした。

3. 研究の方法

本研究では分析の前提として、フーコーの異常性に関する議論、およびイアン・ハッキングの測定に関する議論を参照する。というのも彼らの試みは、精神医学や心理学を権力装置とみなし、それが個人と社会の関係をいかに編成するかに焦点を当てるからである。

フーコーは講義において、「正常化 = 規範化の権力」という概念を導入している。彼が目指すのは、犯罪と病のあいだで、「異常性」を産出しつつ管理する正常化 = 規範化の権力を探求することである。これによって第一に精神医学や性科学が、正常と異常の関係を組織する科学的な装置として機能してきたことが明らかにされる。特に精神医学は、本能と行動の自動性を問題とし、自動性による規範からの逸脱を異常性として取り扱ってきた。第二にこの過程において、子どもが正常化 = 規範化の権力の射程に収められていったことが示される。そこでは子どもの性本能の逸脱が同定され、小児性の痕跡が異常性として追及されたのである (フーコー 2002)。

精神医学や性科学と並んで、19 世紀末以降、正常と異常の関係を組織化する装置として機能したのが、

諸々の逸脱を測定し、比較する試みである。ハッキングは、それら測定の科学がいかに発展してきたかを、フーコーの影響下で検討している。ハッキングによれば、19世紀に社会や人間の諸要素を測定する試みが開始され、人間の身体や行動を測定し、平均人や正規分布といった観点から正常と異常を分割する装置が形成されていく（ハッキング 1999）。チェザレ・ロンブローゾやフランシス・ゴルトンらの試みは、測定と比較に基づいて、本能における自動性を可視化し、管理する試みであったと言えるだろう。

19世紀末から20世紀にかけての子どもを対象とする科学的な試みは、正常化＝規範化の権力のひとつとして、一方で、本能の逸脱や小児性を対象化していく。例えば、本能と行動の異常性の問題が治療教育学のうちに組み込まれ、あるいはフロイトの子どもの性に関する議論が「手におえない子ども」の行為を理解する解読格子となった。他方で、子どもの知性という不可視の能力を測定する技法が練りあげられていく。グランヴィル・スタンレー・ホールは、子どもがどのような観念を有しているのかについて調査を行い、さらにピネーが、テオドール・シモンとともに子どもの知能を測定する方法を開発した。

本研究では、こうした一連の展開のうちに、「子どもの科学」の両義性を見いだしていく。近藤和敬によれば、フーコーは正常化＝規範化の権力が、一方で、正常と異常の境界線を固定することを問題化し、他方でそれが絶えず逸脱を産出し、新たな規範を創設すると考えていた（近藤 2011）。そうであるなら、子どもを取り囲む科学装置においても、同様の両義性を見いだすことができるだろう。このような観点からとりわけフロイトとピネーの試みを検討した。

4. 研究成果

無意識と表象について

19世紀末、無意識の科学が形を整えはじめると同時期に、子どもに対する科学的な関心が高まっていた。とりわけフロイトとピネーは、ともに無意識を探求することから出発し、子どもの欲望や知性を問題化する技術や装置を練りあげていったと言える。本研究ではまず、フロイトとピネーの試みを、無意

識を探求する科学の系譜に位置づけていった。

心理学者・心理学史家のエドワード・S・リードによれば、感覚と知覚、刺激と表象の断絶をいかに埋めるかは、19世紀以来心理学の課題のひとつであった。ジョン・スチュアート・ミル、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツらは、この課題に観念連合および無意識的な推論の仮説によって答えようとする。すなわち、感覚から知覚が構成されるのは、観念連合の法則によってなされる無意識的な推論の帰結なのだ（リード 2001）。この無意識的推論のメカニズムを探求するという試みを引き受ける形で、ヴィルヘルム・ヴントのもとでは、訓練された被験者を対象とする実験心理学が展開され、サルペトリエール病院では、病理的状态をモデルとした無意識の探求がなされていった（cf. Danziger 1994）。

フロイトとピネーはともに、その初期においてサルペトリエール病院でヒステリーや催眠現象について学び、心的表象の連合主義的な理解を軸に無意識を探求する試みを展開している。彼らがそこで取り組んだ課題のひとつは、知的かつ無意識的な活動をどのように理解するかであった。それは、身体的なものとの心理的なものとのあいだで自動性の問題を捉えなおす試みだと言える。ピネーはそこから子どもにおける知性の検討に着手し、フロイトは無意識概念を掘りさげることによって子どもの欲望を問題としていくのである。

ピネーは心理学者としての経歴の初期に、ミルを熱心に読んでいた。彼の最初の著作は、推論する無意識を、ヒステリー者を対象とした実験によって例証するものであった。そこで彼は、知覚をイメージないし表象の組織化として把握し、この組織化を三段論法の論理にそって理解する。これによって無意識を、イメージを論理的に結びつけるはたらきとして提示するのである（Binet 1899）。

このような無意識理解のもとでピネーは、無意識が第二の意識にすぎないとして、ヒステリー者の無意識的かつ知的な活動を意識の二重化として説明していく。そのうえで彼は、この第二の意識を感覚の強度と関連づけている。すなわち第一の意識に到達しない微弱な感覚が集められ、感覚とイメージを組

織化するメカニズムを通して、第二の意識が形成されるのである (Binet 1896 p.56-67)

こうしてピネーは、イメージないし表象の心理学から出発して、感覚とイメージを組織化する無意識のメカニズムを探求し、これを三段論法のもとで意識との連続性において把握する。これに対してフロイトは、連合主義的な発想のもとで表象の問題系と取り組みながら、ピネーとは異なる仕方でも無意識を定式化していく。

フロイトは初期の言語論において、表象という概念をそのまま生理学に持ち込むことを批判し、生理学的水準と心理学的水準を区別する。これによって表象と連合の関係を再規定し、生理学的水準では、表象が連合の動的なプロセスそのものであることを見いだしている (Freud 1992, SS. 92-100 = 『全集 1』 64-71 頁)。そのうえで彼は、分散的な対象表象と一定のまとまりをもつ語表象とを、開かれた表象と閉じられた表象として区別する。

この区別は後年、無意識と意識・前意識との差異を論じるために用いられる。フロイトによれば、無意識とは、分散的な事物表象 (= 対象表象) の領域であり、それが語表象と接続することで意識や知覚へ到達する (SA3, S. 160 = 『全集 14』 251 頁)。そこでこの問題は、事物表象に固有の論理を探求し、事物表象と語表象との切断や結びつきが産出される契機を、欲望の問題として論じることである。

このようにフロイトもまた、表象を結びつけるメカニズムという観点から無意識を把握しようとした。しかしピネーが三段論法のもとに、無意識と意識を連続的に捉えるのに対して、フロイトは対象表象という観点から、両者の断絶を強調し、無意識固有のメカニズムを探求していく。さらにフロイトはその後、幼児期の光景や欲望という観点を導入し、欲望と結びついた原初的光景が、分散的な対象表象の領域を介して、言語化される過程を探求すると言える。それに対して、ピネーは実験的な手法を洗練させ、知能検査の練りあげに向かっていく。

知能と比較について

心理学史家のカート・ダンジガーによれば、「知能 *l'intelligence, intelligence*」という語は、19 世紀に

知性や理性が生物学化され、段階的なものとして把握されていく過程を反映している (ダンジガー 2005, 119-134 頁 = Danziger 1997 pp. 66-74)。ピネーもまた、知能は段階的であるという前提のもとで、その測定と比較に着手した。彼はヒステリー者を対象とした実験を行う傍ら、自らの子どもを対象として、子どもの知的活動の研究に携わっていく。その後、頭蓋測定の研究などを経て、1905 年にシモンとともに知能検査の方法を発表する。

ピネーらの独創性は、知能の定義を回避し、実効性に焦点を当てて検査の全体を構成した点にあると言える。彼らが導入したのは、第一に、重要な個人差は、複合的な能力が絡みあう高次の精神過程に見られる、という発想である (ウルフ 1979, 156-158 頁)。第二に、各年齢段階の正常で平均的な子どもを尺度にするという考えである (cf. 重田 2003, 129-163 頁)。第三に、教師を実験者として組み込むことである。ピネーは、教師たちと積極的に関わり、教師自身が一種の心理学者になることを促していった (cf. ウルフ 1979, 301-315 頁)。

このようにピネーらの検査は、知能とは何かを示すというより、むしろ装置として機能することに重点を置いている。ピネーにとってそれは、心理学と教育の結節点をなすものであった。彼はある個所で、諸個人の心的能力が存分に発揮される社会を夢想している (ピネー 1990, 20 頁)。個人を集団に適切に配置することで、個別性と集団性という二つの原理を仲介するのが、能力測定の個人心理学なのである。それは、子どもを取り囲み正常と異常の境界を組織する、「子どもの科学」のひとつの範例を示している。

ここで重要なのは、ピネーらの試みが、測定や比較の能力それ自体を測定し比較する試みであったという点である。彼らは、比較の尺度を見いだすことができるかを、知能の指標のひとつに据える (ピネー & シモン 1982)。これに対してフロイトは、子どもにおける知への欲望、ないし比較への欲望を問題とし、そこから知的活動のあり方それ自体を捉えなおすのである。

フロイトの出発点は、ヒステリー者たちを十分に知的だと認めることであった。その際に彼が導入し

たのは、知らずに知るという無意識の知の論理である。そのうえでフロイトは知的活動と無意識を関係づけ、それを性的なものにおいて基礎づけていく (SA5, S. 100 = 『全集 6』 248 頁)。フロイトは、無意識と結びついた知的活動を、子どもの性理論という観点から論じている。フロイトが子どもの性理論の範例とするのが、小さなハンスの症例 (『ある五歳男児の恐怖症の分析』) である。そこに示されているのは、子どもがいかに謎と取り組み、自らと他者を比較し、さらに不在という問題に直面するかだと言える。

この過程を次のようにまとめることができる。第一に、謎は欲望を掻き立て、空想と密接に結びついた理論の形成を促す。第二に、子どもの比較は、自分と同じものを見いだしたいという欲望に基づき、世界を自らで満たしていく活動である (cf. ウェーバー 2009)。第三に、ハンスは、母におけるペニスの不在と取り組むなかで、様々なカテゴリーを導入する (cf. ラカン 2002)。

こうした独自の知的活動は、子どもに固有の真理探究の様相を示している。それは、正常化 = 規範化の権力としての「子どもの科学」に対して、子ども自身が作るもうひとつの「子どもの科学」だと言えるのではないだろうか。そしてフロイトの試みそれ自体が、一方で正常性と異常性の境界で子どもを管理するものでありながら、他方でもうひとつの「子どもの科学」の側面を有しているように思われる。

継続中の研究について

A. 自閉症について：

いわゆる (軽度)「発達障害」、とりわけ自閉症が、現代における治療と教育の主要な結節点をなすという見通しのもと、その思想的・教育哲学的な検討を試みた。19 世紀末以降、治療教育学は、本能と行動の逸脱を問題化し、子どもを詳細に分析する枠組みを作りだしていった。そうした文脈において「自閉的精神病質」や「幼児自閉症」が論じられることで、精神病と知的障害のあいだの領域が開かれていく。それは、治療と教育が結びついた一連の実践を生みだしたと考えることができる (cf. Eyal 2009)。第二次大戦後の日本でも、自閉症者を介して、学校、

家庭、医学の緊密な結びつきが作りだされている。興味深いのは、レオ・カナーらの試みが、自閉症者の世界を再構成するという方向性を有していたのに対し、20 世紀の後半には、見ためや行動に照準を合わせ、環境を調整しつつ行動の改善を図るアプローチが一般化することである。こうした動向に対して本研究では、自閉症者の世界を探求する意義について、異質な世界の出会いという観点から考察した。

B. ウィーンにおける教育と治療について：

20 世紀前半のウィーンにおける「子どもの科学」の動向を明らかにするために、アルフレッド・アドラーの試みを検討中である。アドラーはフロイトから離反したのち、カール・フルトミュラーらとともに『治療と教育』(1914)を著し、児童相談のための診療所を設置していった (cf. ホフマン 2005)。彼は、子どもの行為の背景に無意識的な意味づけを想定し、それを解釈する一方で、公開のカウンセリングを行い、教師の啓蒙に重点を置くなど、フロイトとは異なった形で自らの実践を発展させている。

本研究では、以下の観点から検討を行っている。第一にフロイトのアドラー批判を検討する。そこで問題になっているのは、サミュエル・ウェーバーが論じているように、自我と主体の位置をどのように理解するかだと言える (ウェーバー 2009)。第二に共同性をめぐる両者の相違を検討する。アドラーが「共同体感覚」のもとで共同性を相互的で水平的関係として捉えるのに対し、フロイトは共同性を、基本的には《父》との垂直的関係を起点として把握していた。こうした相違は、それぞれの実践形式を大きく規定すると考えることができる。第三にアドラーの試みを、フロイトのもとで教育に携わったアウグスト・アイヒホルンの試みと対比する。彼らとともに、「教育困難な子ども」や「手におえない子ども」を焦点化し、ウィーンの教育的かつ治療的実践の基礎を形づくっていく。彼らの理論の実践の相違を論じ、また両者の接近を分析することで、ウィーンにおける教育と治療の様相を示していく。

参考文献：

Binet, Alfred. 1899 *Psychology of reasoning*, translated by

Whyte, A. G. The Open Court Publishing Company.

Binet, Alfred. 1896 *On Double Consciousness: Experimental Psychological studies*, The Open Court Publishing Company.

Danziger, Kurt. 1994 *Constructing the Subject: Historical Origins of Psychological Research*, Cambridge University Press.

Eyal, Gil. et al., 2010, *The Autism Matrix: The Social Origins of the Autism Epidemic*, Polity Press.

Freud, Sigmund.

1989 *Studienausgabe*, S.Fischer. (SA と表記)

—1992 *Zur Auffassung der Aphasien*, Fischer Verlag.

Rose, Nikolas. 1989(1999) *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, Free Association Books.

ウェーバー, S. 2009 『フロイト伝説』前田悠希訳、法政大学出版局。= Weber, Samuel. 2000 *The Legend of Freud*, Stanford University Press.

ウルフ, T. H. 1979 『ピネの生涯 知能検査のはじまり』宇津木保訳、誠信書房。

重田園江 2003 『フーコーの穴——統計学と統治の現代』木鐸社。

下司晶 2006 『精神分析の子ども の誕生』東京大学出版会。

近藤和敬 2011 「生命と認識—エピステモロジーからみる「生権力」の可能性」『生権力論の現在——フーコーから現代を読む』檜垣立哉編、勁草書房。

ダンジガー, K 2005 『心を名づけること——心理学の社会的構成』(全 2 巻) 河野哲也訳、勁草書房 = Danziger, Kurt. 1997 *Naming the Mind: How Psychology found its language*, Sage Publications Ltd.

ドンズロ, J. 1991 『家族に介入する社会—近代家族と国家の管理装置』宇波彰、新曜社。

ハッキング, I. 1999 『偶然を飼いなす——統計学と第二次科学革命』石原英樹・重田園江訳、木鐸社。

ピネー, A. & シモン, Th. 1982 『知能の発達と評価 知能検査の誕生』中野善達・大沢正子訳、福村出版。

ピネー, A. 1990 『新しい児童観』波多野完治、明治図書出版。

フーコー, M. 2002 『異常者たち コレージュ・ド・フランス講義 1974-1975 年度』牧改康之訳、筑摩書房。

フロイト, S. 2006-2012 『フロイト全集』新宮一成・鷲田清一・道旗泰三・高田珠樹・須藤訓任編、岩波書店 (『全集』と表記) ホフマン, E. 2005 『アドラーの生涯』岸見一郎訳、金子書房。

ラカン, J. 2006 『対象関係 下』J-A. ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店。

リード, E. S. 2001 『魂から心へ——心理学の誕生』村田純一他訳、青土社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

渋谷亮 「イメージと幼児期：フロイトにおける表象と原光景について」『成安造形大学紀要 第 7 号』芸術文化研究所、61-77 頁、査読無、2016 年 3 月

〔学会等発表〕(計 2 件)

渋谷亮 「発達障害の戦後史：世界の結び目」精神分析と倫理研究会第 3 回(於：立命館大学) 2015 年 3 月

渋谷亮 「無意識の科学から子どもの科学へ、フロイトとピネー 比較すること、あるいは愚かさについて」日本教育学会第 75 回(於：北海道大学) 2016 年 8 月(予定)

〔図書〕(計 1 件)

【翻訳】ブルース・フィンク著、上尾真道・小倉卓也・渋谷亮訳 『エクリを読む 文字に添って』人文書院、2015 年 9 月

6. 研究組織

研究代表者

渋谷 亮 (SHIBUYA Ryo)
成安造形大学・芸術学部芸術学科・講師
研究者番号：10736127